

自分は控え目だ、と言っている紫式部は、清少納言に対しては手厳しい。

清少納言は得意顔をして偉そうにしていた人です。あれほど賢(かしこ)ぶって漢字を書き散らしているけれど、真名書きならし、よく見れば、足りない点が沢山あります。彼女のような目立ちたがり屋は、思った以上に見劣りがして、ゆく先は悪くなっていき、こういう人の末路が、どうしてよいのでしょうか。

まるで口論した直後に日記に向かったような気がする。この清少納言評の前に和泉式部と赤染衛門評もあるが、この2人に対しては賛辞を呈しつつも結論は、自分のほうが上、と言わんばかりである。負けず嫌いの式部の一面を垣間見る気がする。ここで思い出してほしいのは、「紫式部が男だったら」の冒頭で紹介した姉弟の教養に関わる父親の言葉である。よく考えると、あの話は、他人が書いているなら美談として讃えられもするが、式部本人が書いていることを考えると、自慢以外の何ものでもなかろう。紫式部の控え目に騙されてはならない。実は、誰よりも教養あることを喧伝(けんでん)しているのである。

ところで紫式部と清少納言、この両人は顔を合わせたことがあるだろうか。紫式部の物言いから、よく顔を合わせていたように錯覚するが、おそらく会ったことはなかろう。清少納言が仕えた一条天皇の中宮、藤原定子(977～1000)が亡くなって5、6年後に紫式部が中宮、藤原彰子(988～1074)のもとへ出仕しているので。それなのに目の敵のようにしているのは、紫式部が出仕した時、一条天皇の後宮は清少納言の評判で持ちきりだったのであろう。それに対する対抗意識の表れというか、嫉妬と見たい。このことを脳裏において時代祭を見る時、いつもほくそ笑んでしまう。清少納言と紫式部が一つ車に乗って、にこやかにしている姿、これは歴史事実ではない。

清少納言は『源氏物語』を読んだ可能性はないに等しい。いっぽう紫式部が『枕草子』を読んだ可能性はどうであろうか。清少納言は『枕草子』について、「人に見られることもなかろうと思い、あれこれ書き留めて隠しておいたのに人目に触れてしまった。読まれたら都合の悪いこと、差し障りのあることもある」と記している。もし紫式部が読んでいたら、あの程度の批評では済まないかも。

めぐりあいて見しやそれとも分かぬまに雲がくれにし夜半(よわ)の月かな

幼友だちに久しぶりに会ったとき、と詞書にある紫式部の歌。百人一首に採るときに撰者の藤原定家はどういう意図でこの一首を選んだのか、知りたいところだ。作者が大物だけに歌意も複雑そうだ。



時代祭では京都御苑、御池通、平安神宮道に有料観覧席を設置します。

時代祭については → [京都観光Navi](#)